

白神の動植物生態は



捕虫網を手に、指定された地域で虫類の採集をする参加者

深浦で調査イベント

市民参加型の生物多様性調査イベント「白神バイオブリッツ」が27日、深浦町松神地区の観光施設・アオーネ白神十二湖周辺で始まった。遠くは広島県など県内外か

ら約130人が参加。28日まで24時間にわたって、あらかじめ決めた地域内に生息する植物、昆虫などを採集、観察して記録する。弘前大学農学生命科学部附属白神自然環境研究センター（中村剛之センター長）と、合併20周年記念事業の位置付けで町が共催した。（神秀穂）

専門家が市民ら多彩に観察

初日の調査は午前11時にスタート。国立科学博物館、県立郷土館、津軽昆虫同好会、津軽植物の会、白神キノコの会などから動植物の専門家、学生・院生らがスタッフで加わり、小学生も含む一般参加者と同行して植林地、草地在主体の地域探索に向かった。コケ類、鳥、クモ類なども対象で、本部に用意された顕微鏡も使い、秋の季節の多様な動植物に触れた。現在の動植物の生息状況を調査、記録することは、未来の環境変化に備えて重要な意味を持つという。

同センターによると、夜間は光で虫をおびき寄せるライトトラップ、トレイルカメラで動物撮影、懐中電

灯頼りの林道ナイトハイイク、早朝の探鳥会などプログラムは多彩。採集した生物の同定、標本作成も行う。調査結果は年内にも報告書にまとめる予定だ。

大館市から、高校生の息子と参加した女性（45）は「生き物探しが好き。いつもと変わった場所で、新しい発見にワクワクしている」と、楽し気に語った。

白神バイオブリッツは2023年に鰯ヶ沢町の「白神の森遊山道」、24年は西目屋村の「白神自然観察園」で実施し、今回は3回目になる。

この画像は、当該ページに限って”陸奥新報”の記事利用を許諾したものです。無断転載はできません。